

DHARMA EYE



法眼



ご挨拶

所長 藤田一照  
曹洞宗国際センター

いつも『法眼』をご愛読いただきありがとうございます。  
1997年（平成9年）に曹洞宗北アメリカ開教センター（現曹洞宗国際センター）のニュースレターとして創刊された本誌も、多くの方々に支えられてこの号で通巻26号を迎えることになりました。

本年4月、奥村正博初代所長のあとを継いで国際センターの所長に任命された私は、『法眼』の編集者という重責を担うことになりました。このニュースレターは分量としてはささやかなものではありませんが、奥村師が創刊号に書いておられるように、「日本と海外の曹洞禅仏教徒双方から情報を提供し、お互いの対話を促進」する一助となるべく、引き続き誌面づくりに工夫を凝らしていきたいと思っております。今後とも皆様からの率直なフィードバックや忌憚のないコメントをいただければ幸甚に存じます。

私はこれまで一寄稿者として『法眼』に関わってきました。第2号から第19号まで『坐禅参究帳』と題した坐禅についての拙論を連載させていただき、第20号からは『正法眼藏坐禅箴 自由訳』の連載を始め、現在も継続中です。また、海外から届いた英語の原稿を日本語に訳して日本語版に載せるといふ、翻訳者としてもしばしばお手伝いをさせていただきました。これからは外部の寄稿者・翻訳者としてではなく、編集者として内部から寄稿・翻訳だけでなく企画・編集にも携わることになります。

さて、現在では、海外において曹洞宗の教えに添った活動をおこなっているとされる寺院・禅センター・禅グループの

数はゆうに600を超えています。そこには、「曹洞宗檀信徒」と呼べるような人たちから、「曹洞禅修行者」と呼べるような人まで、実にさまざまな形の「曹洞宗」が展開しています。この『法眼』を発行している曹洞宗国際センターは、海外における曹洞禅が呈しているこのような多様な実態に対して、現地の状況に則した布教教化活動を展開することを目的として設立された組織です。したがって、国際センターが何よりもまず明確にしておかなければならないのは、「どのような人たちに」、「なにを」、「どのように」伝えていくのか、という点です。国際センターが向かい合うことになる「海外の人々」とはいったいどのような人々なのか、どのような価値観と意識をもってどのような生活をしているのか、彼らは何を求めて曹洞宗に関わっているのか、彼らに向かって布教し教化しようとしている当の「曹洞宗」とはそもそもどのような教えと実践なのか、それは海外においてははたしてどのような意義と有効性を持ちえるのか（伝法救迷情の道たりえるのか）、もし持ち得るのだとすればそれをどのような表現と媒体を通して伝えるべきなのか…。

曹洞宗宗憲第3条には「宗旨」として「本宗は、仏祖単伝したがの正法に遵い、只管打坐、即心是仏を承当することを宗旨とする」とあります。宗旨というのは言うまでもなくその宗教の根本的な考え方（根本義）のことなので、布教・教化はすべてこの宗旨の表現として立案・実施されるべきです。しかし、このままではあまりにも難解であり抽象的ですから、それがいったいどういうことなのかを、海外の人たちにとってよく理解できるように、より具体的な表現と実行可能な実践法に敷衍していく努力が払われなければなりません。さらには、こういう宗旨が彼らにとって実質的な生きる糧となるものなのか、もしそうだとするならばどういう意味においてなのか、この現代という時代においてそれを広めていく必然性はどこにあるのか、を明らかにしていかなければなりません。（このような問いは日本国内で布教教化に当たっている方々にとっても切

実なものであるはずですが。ですから国際布教が直面している諸問題はとりまなおさず日本の曹洞宗にとって格好の試金石になると私は思っています)

私は新しい所長として、このような基本的な問題意識につねに立ち返って、国際センターが何をすべきなのかを問い直しつつ、その活動を少しずつでも充実させていきたいと願っています。

そのような作業は、日本の内外において様々な方法で曹洞禅に関わっている多くの人々とのオープンで親密な共同作業としてなされていかなければ、大きな実を結びません。みなさまからの尚一層のご協力ご支援をお願いしてご挨拶とさせていただきます。

合掌



辞令伝達式



辞令伝達式

## ご挨拶



国際布教総監 ルメー大岳

北アメリカ国際布教総監部

2010年4月1日、私は北アメリカ国際布教総監部の国際布教総監に任命されました。故山下顕光総監の後任として12年以上総監職をお務めになられた秋葉玄吾前総監から引き継ぎました。私は北アメリカ国際布教総監部で初めての日本人以外の総監となり、それは総監部にとって大きな変革を意味しています。私は総監として2つの業務をおこなうこととなります。まず、北アメリカにおける曹洞宗の行政の代表者としての業務と、ロサンゼルスの大本山北米別院禅宗寺の主任としての業務です。実際のところ、私は総監職を要請されるとは予想もしておりませんでした。この変革の（現在の時点で私に見える）いくつかの側面について考えてみたいと思います。

この変革という事態を私が強く感じる理由の一つは、人々が私の役職をいろいろ違った呼びかたで呼ぶことです。ある人は“ビショップ (Bishop) ”、ある人は“ディレクター (Director) ”、またある人は“総監”と呼びます。私は禅宗寺の詳細な歴史をすべて把握しているわけではありませんが、ある時点で禅宗寺の主任をキリスト教的な呼称で呼ぶのが最も適していると感じられたようです。それは、第二次世界大戦中アメリカ政府の戦争政策のひとつとして、日系人がしばしばひどい扱われかたをされ、収容所に送りこまれていた時には特にそうであったでしょう。

日系移民の方々がこの地で寺院を建立し護持していくにあたっての第一の関心事は、法事や葬儀に関連した伝統的な法要や儀式を執り行うことができる日本人の曹洞宗僧侶がいるかどうかということでした。禅宗寺はアメリカ国内の曹洞宗の主要な寺院であり、日本人の曹洞宗僧侶が駐在し、禅宗寺の主任は当時アメリカ本土に存在する他の4、5ヶ寺の監督だと考えられていました。なぜなら、禅宗寺は北アメリカにおける大本山永平寺と總持寺を代表する海外の特別寺院、両大本山別院としても存在していたからで

す。(大半の読者はおそらくご存じかもしれませんが、現在海外における曹洞宗は4つの区域、ハワイ・北アメリカ・南アメリカ・ヨーロッパに分割されています。それぞれの区域の事務所には総監と数名の職員がおります。ハワイは、その島々へ渡った日系移民の長い歴史によって、北アメリカとは別の地域とされています)

禅宗寺はこの約90年の間に様々な変化は確かにありましたが、日本人や日系アメリカ人社会のために依然として伝統的な機能を保持しています。今の時点では、2つの大きな変化があり、ひとつは、お寺のメンバーが減少の傾向にあること、もうひとつはお寺が様々な日本の文化的な稽古事がおこなわれるセンターになったことに触れておけば十分でしょう。もちろん、お寺が日系社会の人々が社交その他をおこなう場所として提供するという社会的、文化的な機能をいつも持ってきたことは確かですが、近年ではその傾向がさらに顕著になってきています。

ご存じの通り、この約90年の間にアメリカの曹洞禅の状況は劇的に変わりました。50年前には「禅センター」という言葉は全く知られていませんでしたが、現在では200以上の禅センター(含まれる場所の違いによって、その数は2倍になるとも言われている)が北アメリカに存在しています。いずれにしても、禅や禅修行に興味を持つ北アメリカの人々が非常に増えてきています。それが、私の新しい役職を「ディレクター」と呼ぶ方向に動きつつあることの一つの理由であることは確かです。この呼称は、曹洞宗に国際布教師として登録されている54名、そして北アメリカ国際布教総監部管内で活動する曹洞宗に登録されている僧侶に対して、曹洞宗宗制を可能な限り適用するという行政的な責任をこの役職の人が負っていることを表しています。北アメリカには、それぞれの師僧から曹洞禅の指導を許可されている曹洞宗僧侶は多数いますが、特にこの54名の僧侶たちは日本の曹洞宗が定めた条件を満たしているので、宗務庁(東京にある曹洞宗の本部事務所)によって正式に認可された人たちなのです。

現在、北アメリカ総監部が直面しているいくつかの行政的な問題は、北アメリカ国際布教総監部、並びに北アメリカ総監部の現地法人の付随定款の改定、教師賦課金の問題

禅センターを特別寺院として登録する問題、結制安居をおこなうための申請に関する諸問題などであります。これらは、一方向的な問題ではありません。総監として重要なことは、北アメリカの僧侶や禅センターの問題や状況を宗務庁に伝えていくことです。しかし、なかでも私たちが直面する最大の問題は、北アメリカの曹洞宗僧侶たちが既に行った修行や研鑽を認めるための北アメリカにおける規則と指針を定めることです。それらの基準が採用され、適用される時、それらの僧侶は日本と北アメリカの両国で認められた正式な曹洞宗僧侶として、私たちのグループ(総監部に受け入れられることになるのです。

“ビショップ(Bishop)”にしても“ディレクター(Director)”にしてもその呼称は私にできることに比べて大きすぎるように思いますが、(誰かが私をどう呼べば良いか聞いてきたならば、私は“総監”と呼んで下さいと言っています)私が心から望みまたやりたいと思っていることは、一つには禅宗寺の坐禅会をさらに育て上げ、お寺のメンバーを増やし、そしてすべてが上手くいくなら、坐禅会の新しいメンバーをお寺の古いメンバーたちの日本の文化的な生活のなかにまとめていくことです。これはどちらの側にもそれぞれ利益になることです。お寺は新たなメンバーの獲得を必要としていますし、アメリカの禅は、私が思うには、日本の文化と伝統からの望ましい影響を受けることからあまりにもしばしば切り離されてきているからです。総監としての仕事の点については、私の目的は北アメリカに釈迦牟尼仏、道元禅師、瑩山禅師の教えを敷衍させる方法を探す手助けをすることです。



## ～宗立専門僧堂の感想～



### 仏陀の共同体の清規としての 「和」の実現

ヴィヴィアーニ省心  
(ストルミア大幢徒弟)  
イタリア共和国・円空道場

アメリカで初めての安居、また西洋では3回目となる曹洞宗宗務庁主催の宗立専門僧堂が、雪山の美しいロサンゼルス郊外の陽光寺禅マウンテンセンターにおいて、2009年12月15日から2010年3月15日まで開催されました。2007年と2008年には、宗立専門僧堂はフランスにある弟子丸泰仙老師によって設立された禅道尼苑で開催されました。

私は2008年、そして今回の宗立専門僧堂に掛搭しました。これにより、私は曹洞宗の定める教師資格の最低要件を満たすことができました。今回この紙面に私の宗立僧堂における体験について記事を書くように依頼されたことを光栄に思います。

初めに私はこの宗立専門僧堂の開催を可能にしてくれたすべてのの方々に感謝を申し上げます。財政的な観点から見ても、また人材の登用という観点から見ても、この安居が成功裡に終わるためには、上から下へと下から上へとという双方向の多くの力を合わせることで、曹洞宗宗務庁の英断と多大の費用が必要であったことは間違いありません。

#### 多様性のなかの統一

アメリカの陽光寺は前角老師、ヨーロッパの禅道尼苑は弟子丸老師という現代の2人の老師たちによって創立されました。この2人は同時代の他の日本人禅匠たちのように道元禅師と瑩山禅師の禅を西洋諸国に伝えました。彼らは、曹洞禅の伝統の中に取り入れられた釈迦牟尼仏の教えが普遍性を持っていること、またその教えが「多様であること」、法を育て伝える良い土壌として異なる状況や環境、さまざまな民族や文化に適応する力を内にもっていることを信じていました。

今回の宗立専門僧堂はそれと同じビジョンから生まれたものでした。男性と女性の僧侶がアメリカ（カリフォルニア州、バーモント州、インディアナ州、オレゴン州）、南アメリカ（コロンビア、ブラジル、ペルー）、ヨーロッパ（フランス、ドイツ、イタリア）、そして日本と様々な出身地から集まり、陽光寺で90日間の修行し、最も純粋な伝統に根を持ちながらも、同時に常に新たな解釈を許してきた修行の諸原則を分かち合いました。

私たちは曹洞宗のこのような特質を大切にし、引き継いでいかなければならないと確信しています。禅のサンガは「地球的規模で考え、地域で活動する」ことができ、その伝統における正しい修行と儀式についての深い知識をもつことから出発して、多民族と多文化から成り立っている絶えず変化する世界の現実を受け入れることができます。例えば、今ではすべての人間が単に個人的なデータの観点からだけではなく、自分が本当に受け容れることのできる男性性あるいは女性性という性別を選ぶことによって、自らのアイデンティティを定義することができるのです。「一般世界」においてさえ、たとえそれが容易にはいかないとしても、どのような形の表現であれ「他なるもの」に対して心を開きそれを受け容れることができるとするなら、仏教的世界（私たちが持っている、有情非情の苦しみに耳を傾けそれに打ち勝つ能力に基づいた世界）はなおのこと人生のあらゆる場面に影響を及ぼす新しい変化を無視することはできません。

#### 仏家の務め

奥村正博老師は知事清規の講義の中で、『典座教訓』に触れ「そもそもの始めから、仏家の務めは修行僧のコミュニティを援助することにある」と言われました。愚見では、これこそ、私が陽光寺での90日間の安居修行の中で現実のものになっていくのを見届けた教えそのものです。私はそのような経験を、安居を実現するために直接的、間接的に協力したすべての人々のおかげで持つことができました。この経験は私に次の言葉を想い起こさせました。「唯仏与仏 乃能究尽 諸法実相（すべての仏は仏とともにあらゆる物事の本性を貫いている）」（法華経方便品）

“次に続く世代のために仏法が継承されていくことを確かなものにする”という陽光寺の使命を守るため、そこの堂頭

であるフレッチャー天心師の思慮深い指導のもと、禅マウンテンセンターの人々は修行するための場所や鳴らしものの準備（新しい単の設置、僧堂飯台の際に使用する木製の台、新しい鐘樓の設置、新しい発電機の購入など）を始めとして、境内、事務所や作務の手配、特にキッチンでの継続的な協力は、私たち安居者の修行を支えてくれました。また、この3ヶ月の安居の全期間、西洋的な素晴らしい菜食料理を調理してくださった典座の虎眼さん、そして彼とともに働いて下さった慈心さん、そして陽光寺のすべてのメンバーに特に感謝致します。



作務

秋葉玄吾老師の正確で毅然とした指導（南原一貴師や伊藤祐司師、近藤真弘師が常住しての補佐による）のもとで日本人スタッフは、安居の屋台骨となってくれました。彼らは、みんなの母親のような慈悲をもってすべての安居者の修行につき従い、文化や教育の多様性を尊重しつつ、わずか3ヶ月の間ですべての安居者が伝統的な進退作法を知りそれを使えるようにしてくれました。

また、この安居の成功は、3ヶ月間常住して下さったベナージュ大圓老師、そして永平寺と總持寺、さらに愛知専門尼僧堂の研鑽僧のおかげでもありました。さらに、師家養成所の6名の僧侶が短期間でしたが、賞賛に値する親切さと辛抱強さの模範を示してくれました。

細部への注意と調和の探究、この2つを融合させることが

この安居の始めからの目的であったように思われました。すべての安居者が話せるわけではない英語でのコミュニケーションが困難な時もありました。

僧堂での作務と実際の修行は日々の行持が何であるかを明確にする上で決定的でしたし、最初から最後まで配慮にあふれ常にそこにおられたベナージュ大圓老師やまた齋藤芳寛老師をはじめとする招待された講師の方々の教えもまたそのようでした。志保見道元老師、フレッチャー天心師、奥村正博師、アンダーソン全機師、ワイツマン宗純師、マーゼル玄法師、駒形宗彦師、カール・ビルフェルト博士にも感謝を申し上げたいと思います。そして、ルメー大岳師やマクマレン懐浄師が果たしてくれた通訳者としての貴重なる寄与は忘れることができません。

この安居の中心的なテーマは多様性のなかの統一ということでした。それぞれの講師は、伝統的なある特定のテキストについて話しをしたり、または一般的な仏教の諸問題を議論したり、個人的な経験を通してアメリカの禅の歴史を回想したりすることによって、こちらに伝わってくるほどの情熱を持って私たちの勉学を深め活気づけてくれました。また、彼らは現在と未来にわたる私たちの精神的な道行きの理解を深めるような強力な動機付けと手がかりを与えてくれました。この3度目の安居の公な目的が、曹洞宗の規範に則って日本人以外の僧侶を教育することであったとするなら、私も含め他の安居者も同様だと思いますが、その目的を達成できたと言えると思います。しかし、私はもう一つの達成を加えたいと思います。それはある特別なアイデンティティ、つまり世の中である役割を担った禅僧としてのアイデンティティを私たち一人一人が自覚したということです。

今や、他者への奉仕に従事し、成熟した修行を自分の生まれた国の人々と分かち合い、さらに将来的には（是非やろうではありませんか）お互いに協力してそれぞれの国の修行道場で国際安居を組織することによって、このたびのような機会と修行によって私たちが得た利益を恩返ししていくのは、私たちのような新しい世代の僧侶の番なのです。おそらく、その時はすでに到来しているでしょう。

## ～宗立専門僧堂の感想～



朝食



略布薩



書道習儀

### 私の正師としての安居



ブラッドレイ正龍(奥村正博徒弟)  
アメリカ合衆国・三心寺

私たちの乗ったバンが舗装されていないでこぼこの道を下りていく間、私は3ヶ月間私たちの家であり修行道場でもあった陽光寺禅マウンテンセンターの山門がサンハシント山の雄大で荒涼とした風景の中にだんだん小さくなっていくのを見つめていました。その高地の荒野の美しさの中に私たちをしっかりと抱きとめてくれた、ユッカやオーク、松の木などが点在する山の頂がゆっくりと遠のいていくのを見ながら、私は悲しみに胸がいっぱいになりました。これらの山々は、この3ヶ月間私に深い慰めを与えてくれました。気温20度前後のさわやかな日々、1週間も降り続く雨の日、激しい吹雪の日、どんなときにも私は可能な限りその山々の荘厳な静けさを見つめ、そのたびに山々の変わらぬ雄大さに強く励まされ、こころに落ち着きを取り戻しました。宗立専門僧堂で様々な困難や移り変わる感情を経験するたびに、その山々は数えきれないくらい長い間無数の存在に対してそうしてきたように、静かな雄大さの中に私をいつも包み込んでくれている、そう感じる事ができたのでした。

これまでのところ、価値判断は私が出会うであろうすべてのことにきちんと対処する能力の妨げになるだけであると信じて、私たちの安居修行について分析することを極力避けてきました。しかし、今ようやく私はその3ヶ月間の経験をより深く思い返してみようと思います。安居期間中、私は何を学んだのだろうか？ 安居の目的は単に曹洞宗の作法や法要の進退を安居者に教え込むことだったのだろうか？ 文化的に大きく異なる僧侶が集まっているのに、どうしてこんなに早く、そして深く結びつくことができたのだろうか？

私の法祖父である内山興正老師は、「坐禅が最も尊い唯一の正師である」と言いました。もし、私とその言葉を文

字通りに理解し、坐禅をすることこそが正師であると考えたならば、私はこの安居期間中、もっとたくさん坐りたいという欲望に駆られたことでしょう。曹洞宗は西洋人僧侶には坐禅をする機会が十分にあることがわかっていたので、海外においては容易に修行することができないことに焦点をおくという決断をしていました。私は内山老師の言葉は、もっとも深い意味においては、坐禅の修行をさらに超えたところにあると信じています。もちろん、内山老師は坐禅をすることの重要性を説いていますが、「坐禅こそが正師である」という言葉は、私たち自身の人生経験とともに修行することを通してのみ、法を正しく、そして深く明らかにしていくことができるということも意味しています。他の誰も私たちに代わって修行することはできません。自分の命の一部としてすべてのものに出会うことをとおして、相互に依存し合い普遍的に分ち合われている命の真実に目覚めなければならないのです。それは、坐禅をするときは“坐禅が正師”、料理をするときは“料理が正師”であり、また安居しているときは“安居が正師”であるということです。内山老師は只管打坐に根ざした修行を単純でありながらも深遠な仕方であって、彼が儀式的な“おもちゃ”と呼ぶものを避けました。私が宗立専門僧堂に掛搭することを決めた理由は、西洋に曹洞禅を伝えてくれた文化とより直接的につながることは自分にとって大変貴重な経験になり、また曹洞宗僧侶の修行の要件をみたくことは、いつか法の上で他の人々をサポートする私の助けになるかもしれないと感じたからです。私は、安居中におこなわれる進退習儀を強調する修行のことを内山老師だったらどう思うのだろうかとか時々考えざるをえませんでした。内山老師の「坐禅は正師である」という言葉はまた、「私の言葉を真理として鵜呑みにせず、あなたたち自身の経験や修行を通してあなた自身の人生の意味を見つけなさい」という意味でもあると思いました。西洋人僧侶として、自分がこれまで経験したことのない日本的な修行をどのように評価することができるのでしょうか？ ですから自分の正師としての安居に対してどこまでもオープンな態度でいようと決心したのでした。自分の安居経験についてもっと深く考え始めると、私はその安居が確かに素晴らしい正師であったとわかったのです。私はある日不思議に思ったことがあります。例えば、僧堂での行鉢の時に文珠菩薩にお膳をお供えする、その意義についてです。私はこれまでの修行の過程で何度

もこの儀式に参加してきました。しかし、なぜ小型の器にわずかの食事を盛り、行鉢の前に文珠菩薩にお供えするのかがまだ理解できていませんでした。しかし、今回總持寺の研鑽僧が礼儀正しくそれを行じているのを見て、少なくとも私にはその意味が明らかになりました。この作法は、私たちがいただくとしている食事は坐禅（文珠菩薩がそれを象徴している）へのお供えであり、そして私たちを生かしてくれている無限の宇宙へお返しをするための修行を支える栄養なのだ気づきました。そして、そのお供えをする順番が私にまわってきた時、その行為の意義を思い出し、自分をしっかりとそこに現存させることによってその行為が坐禅の延長となるように努力しました。もちろん、それを「ほら、おれを見てみる！（うまくやっているだろう）」とか「さっさと終わらないかな、そしたら食べれるのに」といった態度でおこなうと、それは私の儀式的な「おもちゃ」となる可能性も十分にあります。しかし、その選択をするのはほかならぬ私です。私たちが人生の中で遭遇するほとんどの状況においてそうであるように、私は儀式的な修行の意義は、主にそれを受け取る私の側の心構え次第であることがわかったのです。



僧堂行鉢（浄人）

3ヶ月間の安居という師は、過度の要求をするけれども慈悲深い案内人でした。私たちが受け取り、こなしていかなければならない新しい情報量は、特に最初の頃は圧倒的なものでした。しかし私たち安居僧は僧堂での日々の任務をすぐに実行する責任がありますから、普通なら数ヶ月も

しくは数年かけて主に観察することによって学ぶことをわずか数日で教えられました。私はしばしば自分の個人的努力を超えた、集団的な慣性力とでもいうような力が自分を駆り立て修行の時間や厳格な毎日の差定をやり遂げさせ、最初は不可能に思えたことも出来るようにしてくれたかのような感じがしました。例えば、拳経や回向をおこなう維那の配役を10日後にやらなければならないとわかったとき、私はぞっとしました。安居が始まって日本人僧侶が回向を唱えるのを数週間にわたって耳にはしていました、安居の前には日本語の回向を聞いたことはなく、ましてや日本語の回向を唱えたことなど一度もありませんでした。私は維那が重要な役割であることは知っていました。維那は心のこもった読経の始まりをつかさどり、僧団の修行をすべての衆生の利益のために回向するという大きな責任を負っています。正直に言えば、自分にそのようなことができるとは思いませんでした。習得しなければならない微妙な発音があまりにもたくさんありましたし、まだまだ自信が足りなかったからです。しかし、日本人の法友たちは根気強く補助してくれ、ありがたいことにそれらの回向を録音させてくれました。（私はその録音を数え切れないほど聞きました。）秋葉堂長老師は回向の技術的なことよりも、それをおこなう時どのような心を込めるかという精神的な面を強調されました。それは、回向の本質を理解するのに非常に助けとなり、そのおかげで他の基本の進退作法に関してもその精神面に目を向けることができるようになりました。私に維那の配役がまわってきた時には、まずまずうまく行きました。完璧と言うにはほど遠いものでしたが、ともかく問題なくできました。この経験をふりかえると、私の師僧である奥村正博老師から最初に教わった、安居と普段の生活の本質的な性質についての教えの実例になっていたことに気づきました。維那の配役に向けての私の上達は数え切れない人々の実践があっただけで始めて可能でした。安居者と彼らの読経、手本となって私を指導してくれた僧侶、そしてその僧侶を指導した僧侶と、あげればきりがありません。そして、私に拳経と回向をする順番がまわってきた時には、私の代わりに維那をやってくれる人はいません。私が拳経や回向をする能力は数えきれない他の多くの人々の努力に依存しているにしても、そのための準備をする努力をばらばら、その番が来たら実際にやるのは私一人なのです。私にとってこの相互依存的発生(縁起)の真実、つま

りのちは絶対的な普遍的依存性と絶対的な個々人の責任性によって同時に特徴づけられているということが、この安居での一貫した主要な教えでした。



涅槃会

この安居は、共に平和で調和した生活をおくることができる人間の能力について大事なことを私に教えてくれました。約20名の幅広い年齢層と修行経験をもち、様々な文化と言語の男性と女性が3ヶ月間たいした不和もなく共に過ごすことが出来たことを考えるとき、私は驚きを禁じえません。特に驚くべきことは、男性も女性もそれぞれひとつの大きな「プライバシーの無い」部屋で共に生活したことでした。この集団の調和ということは、単にお互いの間に不和がなかったということだけにとどまりません。私たちはとても単純でしかも親密な方法で一緒に行動し、お互いを思いやれるようになりました。例えば、僧堂の差定で5日毎におとずれる四九日の貴重な自由時間中、みんながいっせいに洗濯機を必要とするので自分の洗濯をするのは容易ではありませんでした。洗濯機が空いているようにと願いながらも足も運ぶことで1日の大半を費やすこともありました。しかし私が他の用事で忙しかった時に、誰かが私のために洗濯物を少し洗ってくれているということがしばしばありました。また、洗濯場に戻ると、洗濯機から私の洗濯物が取り出され干されているのを見つけることもしばしばでした。安居者は送付されてきた荷物の中身を分け合ったり、また差定や次の行持の威儀に関していつもお互いに確認し合ったりしました。さらにお互いに配役に



ついてアドバイスしたり、質問したりしましたし、感情面でも支え合いました。このようなお互いに助け合おうとする雰囲気は、集団で修行をおこなうための調和を図るために、個々人の観点や関心事はひとまず差し置こうという安居者たちの努力から生まれてきたものだと、私は思います。こうした経験の結果、誠実な修行が持つ力に対する私の信仰はさらに深まりました。

おそらく、相互に思いやるという雰囲気が一番の手本となったのは、曹洞宗の役寮の方々であったと思います。私たちはしばしば僧堂でのさまざまな進退作法についてあれこれと直されましたが、それらの要求は命令というよりも、毅然としてはいるけれども親切な手引きという態度で与えられたものであったように思います。安居期間中、役寮の方々の大きな懸念は私たちの健康状態であり、安居者が充実し実りある修行経験を積むことができるように専念しているという印象を持ちました。例えば、応量器での食事中や朝課中、私たちはいつもチェックされしばしば正されました。しかし、ある朝、一人の役寮が朝課中に私の顔が紅潮していたのに気づき、私のもとに近寄ってきました。（その時、私はちょうど風邪のひきはじめていた）私はその役寮の行動に感動しましたが、そのような気配りの仕方は役寮方がみんな持っていたものでした。

より広い観点で見れば、曹洞宗がこのような宗立専門僧堂を開催すること自体が熱意と寛大さの表れであったと思います。私はこの宗立専門僧堂をおこなうためにどれだけの資金と人的資源が投入されたかを考えると驚かざるを得ません。14名の安居者は3ヶ月間無料で滞在し食事を出していただいただけではなく、綿密な行学を受けることができました。例えば、安居の最初の10日間は、6名の師家養成所の僧侶が中心となってこの安居の基本的な進退作法を統一し、安居者に様々な配役の指導をおこなってくれました。日本やアメリカ国内から素晴らしい指導者が私たちに講義をするためにやってきてくれました。また永平寺や總持寺、愛知専門尼僧堂からの研鑽僧は、この安居期間全般にわたって、私たちを根気強く指導しサポートしてくれました。このような大規模な支援がおこなわれたのは、曹洞宗が西洋人僧侶を信用し、私たちの修行が将来の仏法の成長につながるものであると考えたからこそだと思います。

日本人僧侶たちは私たちに正式な修行と儀式をたくさん教えてくれましたが、彼らが心を込めて修行に専念する見本を示してくれたことが最も価値のある教えであったと思います。差定の調整や様々な行持の実施の仕方には非の打ち所がありませんでしたし、また役寮の方々は計り知れないエネルギーと忍耐力を持っているかのように思われました。彼らには、曹洞禅の教えを自分たちの文化から私たちの文化へと伝えることについての理解を深めたいという真摯な願いがあふれていました。また、彼らはこの安居を曹洞禅を私たちに伝えるプロセスの一部として考えているのだと思いました。私は、曹洞宗の僧侶の方々の誠実な献身ぶり、忍耐と寛大さに心から感謝します。

宗立専門僧堂に掛搭した僧侶たちのあいだに完全な理解と絶対的な調和があったのでしょうか？いいえ。文化的な相違による誤解が生じたか？はい。しかし、その些細な文化的な緊張は、私たちにとっては教師でもあり、また私たちみんなの視野を広め、個人的・文化的な先入観をも手放させてくれたのです。

数時間もたたないうちにロサンゼルスに到着し、そこには、高層ビル、アスファルトの道路、コンクリートや信号機がありました。突然、私から山の守護者たちが遠くに消え去ったような気がしました。しかし、太陽は明るくあたたく輝いていて私の前には新たな可能性が開けているのを感じました。宗立専門僧堂での経験はこれからも私を支え続け、それがもっているより深い意義は、今後長い間にわたって次第に明らかになってくると思います。



閉単式

最後になりますが、この安居期間中ずっと優しい物腰ながら厳格な態度で堂長を務めていただいた秋葉玄吾老師に心から感謝致します。また、齋藤芳寛老師、志保見道元老師、そしてペナージュ大圓老師の示してくれた模範、教えや指導にも感謝致します。さらに、禅マウンテンセンター陽光寺の主宰フレッチャー天心老師の親切なもてなしに感謝します。そして、大いなる感性と根気をもって私たちを彼らの家（修行道場）に迎え入れてくれた陽光寺の居住メンバーの果たしてくれた「舞台裏の働き」にも深く感謝を申し上げます。そして、深い教えと誠実な手本によって私が菩薩の道を歩み始めることができるようにしてくださった、私の師僧である奥村正博老師に深く感謝いたします。

## 正法眼蔵坐禅箴 自由記

### 藤田一照

#### 不對縁而照

ここで言う「照」は、向こう側に照らされる対象物を客体として持ち、それを照明するというような「照」ではない。また、精神、意識、靈魂といったような主体が内面的対象を照らし出して明らかにするというような「照」でもない。外に向かうにせよ（照了）、内に向かうにせよ（靈照）、いずれにせよ自（主観）と他（客観）を二つに分けた上での照らす/照らされるという話ではない。そういう二項対立のない（能縁・所縁という對待のない）万法一切の本来的はたらきが、ここで言われている「照」なのである。それはわれわれが万法に生かされて生きているという事実そのものことなのだ。このような「照」においては、「照」が所縁になることはない。その縁そのものが「照」のはたらきにほかならないからだ。だから、ここで「不對（対せず）」、つまり相手になるものがないというのは、すべてが残らず現れ出ている（全世界に姿かたちをとって現れ出ている現象のほかには隠されているものはなにもない）ということであり、世界を破壊してもなにも新たに出てくるものはないと

いうことだ。それは「微」であり「妙」であり（言語や概念による把握を受け付けない）、（照と縁とが）「回互」しているともいえるし同時に「不回互」であるともいえる。

#### 其知自微、曾無分別之思

この句は通常、「其の知自ずから微なるは、曾て分別の思無し」と読むべきであるが、道元禪師はそのような読み方はしない。「其の知は自ずから微にして、曾無分別の思なり」と読む。「曾」とはここでは「本来」の意味である。人間的な生活世界の成立に先立つ意識以前の生かされて生きている実態を指し、それが「知」と呼ばれる。したがってわれわれは思によって思量分別しつつ生活しているがその思そのものは曾無分別＝非思量のままに生滅している。すなわち「曾無分別の思」は「其の知」と同じことであり、それは他の力を借りることなく、それそのものが自ずからにして「知」なのである。「其の知」とは人間の主観的な意識活動ではなくあらゆる物事の存在の事実である。だから具体的・現実的な知の相は、知られる対象と対立するものではなく、山や河といった形（存在）そのものである。存在するという事は形としてのみ存在する。しかし、その山や河は「微」であり「妙」であって言語や概念を絶している。われわれはそのように微妙なる知をぞんぶんに使用して生きているのだが、そのありようはといえば、魚がびちびちと跳ねるように生き生きとしてなんらの障害や抵抗もなく、自由自在におこなわれている。たとえば、古代の伝説的な天子である禹が黄河の上流に作ったといわれる龍門は鯉がそこを登ると龍になると言われているが、この知（生かされて生きている事実）の働きはそのような門の内側にいるか外側にいるかというようなことにはまったく関わらないのである。禹門には三段階の滝があって三段目の滝を登りきってはじめて鯉が龍に化身すると言われているが、この知の働きの自在さは門の内外を問わない。坐禅はこの知そのものをまっすぐに修行することなのである。だから、坐禅が坐禅になる、あるいは作仏するにはそのような段階の必要がないのだ。ここで言う知はそれをほんの少しでも使用するときには、尽界山河（＝自己の正体）を持ち来たって知するのであり、その尽界山河それ自体の活動（力）をすべてもちいて知るのである。山河と切り離すことができないほど親密であり相即したところ（心法一如）に自己の知があるのでなければ、わずかな智慧も理解もあ

るはずがない。分別思量があとから遅れてやってくると嘆いてはいけな。事實はそういうことではないからだ。ここで言われている思量分別はいわゆる妄分別ではなく「曾無分別の思」のことであり、そこには遅い、とか速いという話が入り込む余地はなく、思量分別と山河は同參、同時だからである。已曾（いぞう＝すでに、かつて）分別の仏、すなわち自覚以前にすでに分別している（不触事の知）自己の正体（仏）が、そこに具現成就してしまっている。宏智禪師の坐禪箴で言う「曾無（ぞうむ）＝本来無＝本来のありかた」とは実は「已曾（いぞう）」のことなのだ。ただし、已曾といっても過去のことでなく現在ただいま成就している事實なのだ。このようであるから「曾無分別」ということは尽界山河と自己とが一つであるからそこには出会う相手が一人もいないということなのである。

#### 其照自妙 曾無毫忽之兆

この句は通常ならば「其の照自ずから妙なるは曾て毫忽の兆無し」と読まれるべきであるが道元禪師は「其照は自妙なり。曾無は毫忽之兆なり」と読ませる。ここで「毫忽（毫は毛すじ、忽は蚕の吐く糸 単位の名称でもある きわめて微細なもののこと）」と言われているものは実は尽（十方）界の存在の事實である。であるから、絶対の妙であり、絶対の照である。それ自身が絶対であるから、どこから持ってくるとか持ってくるということとはまったく問題とはならない。相対するものがないときには将来すべきものありようはないからだ。毫忽が尽界であることは目で見ることも出来ないし耳で聞くこともできない。それは耳目（感覚）の対象としてとらえることのできないものである。世間的な概念の外に仏法の宗旨をあきらかにすべきであり、言語に滞っては眞實は得られない。これが照という存在の事實のあり方である。であるから無偶（相手が無い）であり、無取（取るものがない 人間的欲求の対象にはなりえない）である。このように無偶であるから奇（対立のない単独）であり、無取であるから了（あきらか）であるような照をそのまま信受し受け入れるのが仏法者の態度であり、それを「我却疑著」と表現する。この「疑」はいわゆる疑うという意味ではない。絶対の照の事實を疑問詞をもって言い表しているのだ。言語による表詮を絶したところを疑著という文字であらわし、それが自分の納得のいくようなものではないことを意味する。

#### 水清徹底兮 魚行遅々

ここで「水清」と言われているが、天から降る水（雨）は水清としては不徹底である。いはんや衆生が住む環境世界（器世間）に深く澄んでいる水はここで水清と言われている水ではない。どこまで行っても涯も岸もないような完全に無限定な水こそが徹底の清水なのである。すなわち無辺際的事實を清水と言うのだ。もし、魚がこのような水の中を泳いでいくときにも、行くということがないわけではないが、その「行」は幾万とも言えないほどの行程を進んでいくのではあるが、その「行」を相対的な尺度で測ることはできないし、また窮まるということもない。測る基準になるような岸もないし、浮かぶ場としての空もない（上に空に連なるような水面もない。上方にもはてがない）。沈む底もないので測る者は誰もいない。測るということの問題とするならば、底に徹る清水があるばかりだ。坐禪の功德もまた魚が水の中を行くのと同じである。千や万の行程があるとしてもそれがそれを占い、測ることができるだろうか？徹底の行程（魚が無際限に泳いでいくこと 坐禪のこと）は全体（他に何者も存在しない）の不行鳥道（跡形のない不行の鳥道 際限がないので行ったことにならない）である。

## 国際ニュース

### ヨーロッパ曹洞禪連絡会議

場所：フランス共和国 禪道尼苑

日程：2010年5月28～30日

### ハワイ国際布教総監部研修会

場所：ハワイ州ホノルル 両大本山布哇別院正法寺

日程：2010年6月2日

### 北アメリカ曹洞禪連絡会議ならびに研修会

場所：カリフォルニア州サンフランシスコ 桑港寺

日程：2010年7月30日～8月1日

奥村正博国際センター所長が2010年3月31日に辞任され、藤田一照師が4月1日付けにて国際センター所長に任命されました。

秋葉玄吾北アメリカ国際布教総監が2010年3月31日に辞任され、ルメ一大岳師が4月1日付けにて国際布教総監に任命されました。

